

國學院大學學術情報リポジトリ

「ヒロシマ」から「ウチナダ」へ：
ロマン・キム著『広島からきた少女』中国語訳二種
を巡る諸相

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2025-03-12 キーワード (Ja): 原爆, 中露翻訳, 滬劇, 訪中公演日本新劇団, プロパガンダ キーワード (En): 作成者: 牧野, 格子 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/0002001374

「ヒロシマ」から「ウチナダ」へ

—ロマン・キム著『広島からきた少女』中国語訳二種を巡る諸相—

牧 野 格 子

キーワード

原爆 中露翻訳 滬劇 訪中公演 日本新劇団 プロパガンダ

1. はじめに

中国近現代文学を代表する女性作家の一人である謝冰心（1900-1999）は、1955年に雑誌『讀書月報』に「廣島姑娘」⁽¹⁾という書評を発表した。これは、ソビエト連邦の作家ロマン・キム（1899-1967）が1954年に発表した『広島からきた少女』（『Девушка из Хиросимы』）の中国語訳『廣島姑娘』の読後の感想を述べたものである。

謝冰心は、書評の中で、「この本を通じて、日本の人々が米帝国主義の残酷な抑圧と搾取の下で、祖国と平和のために苦しい闘争をしていることが深く理解できた」⁽²⁾と評価している。そして、この闘争が世界平和を守るための闘争の一部であり、世界中の平和を愛する人々と日本の人々が団結して、水素兵器の使用を禁止し、平和を守るために戦う必要があると主張している。

『広島からきた少女』は、1945年8月6日に広島で原爆の被害を受け、奇跡的に生き延びた少女・スミコ⁽³⁾を主人公にした物語である。スミコは家族全員を原爆で失い、叔父の家に引き取られた後、内灘闘争という米軍基地反対運動に参加していく。謝冰心が指摘するように、物語は反米帝国主義の姿勢を貫き、日本の人々を米国の圧政に対抗する同志として描いている。

ロマン・キムはソ連国内にしながら、日本の生活や原爆の被害、連合国占領下の日本を

詳細に描写している。しかし、この作品は日本語に訳されることなく、日本国内で広く紹介されることもなかった。一方、中国では、二種類の中国語訳が出版され、反響を呼んだ。

本論文では、『広島からきた少女』の二種類の中国語訳を比較し、ソ連や中国での反応、そしてこの作品が中国の伝統劇に改編された経緯を述べる。また、新劇訪中団がその劇を観た際の反応も分析し、作品が各国で共有された形象やその経緯について探る。さらに、通常スパイ小説家とされるロマン・キムが日本を題材にして書いた本作品が、単なる共産圏の政治思想を宣伝するプロパガンダ作品なのか、それとは別の価値があるのか探りたい。本作品を検討することで、冷戦構造における文学状況の一端を見出すことができると考えるからである。

2. ロマン・キムと『広島からきた少女』について

2. 1. ロマン・キムについて⁽⁴⁾

ロマン・ニコラエヴィチ・キム（以下、ロマン・キム）は、第二次世界大戦後に「ソビエト・ロシアの作家、大衆的スパイ小説の作家」として知られる。ロマン・キムはウラジオストクで朝鮮人の両親のもとに生まれた。父・ニコライは甲申事変で親日派のクーデターに失敗し流刑され、母・ナジェージダは閔妃の一族だった。

ロマン・キムの両親は日本人に対する復讐心から息子をスパイとして育て、彼は日本人の協力で慶應義塾幼稚舎に入学した。1906年から1911年まで在籍し、杉浦龍吉が保証人となった。しかし1913年、父の命令で突然退学し日本を去る。彼はロシアに戻り、中学を経て東洋学院に進学した。反赤軍派のコルチャーク軍に動員され、その後、沿アムール軍管区参謀本部の軍事統計部で中国と日本に関する情報収集の特別な仕事に従事した。これが彼の諜報活動の始まりとなった。

大学卒業までの間、ロシアや日本の通信社、新聞社で働き、日本語、英語、中国語、ドイツ語に通じていたため、諜報活動で非常に重宝された。1923年に東方学院を卒業し、ウラジオストクの国立極東大学で教鞭を執り、同時にGPU（国家政治保安部）のメンバーとなり、モスクワに移り、モスクワ東洋学研究所の講師として採用された。1928年まで日本語と極東地方史を教え、芥川龍之介の短編小説二編を翻訳するなど、日本文学の紹介にも貢献した。ロマン・キムは1937年にスパイ活動の嫌疑で投獄され、拷問により虚偽の自供を行ったが、これが幸いして取り調べが長引くうちに、彼自身の能力を認められるようになった。1940年に有罪判決を受けたが、1945年に釈放された。その間、妻とともに投獄された息子が亡くなる悲劇にも見舞われた。

釈放後、ロマン・キムは『順川で見つかったノート』を発表し、その後もスパイ小説を

次々と発表。代表作には『広島からきた少女』、『読後焼却のこと』などがある⁽⁵⁾。彼の作品は中国や日本、欧州諸国でも翻訳された。『広島からきた少女』では、特に日本の戦前戦後の生活や出来事を詳細に描いている。これは彼の日本での生活や長年の諜報活動の経験が役立ったと考えられる。1967年にモスクワで亡くなったが、その波乱に満ちた人生はいまだに多くの謎を残している。

2. 2. 『広島からきた少女』について

『広島からきた少女』は、1954年にソ連の雑誌『Октябрь（十月）』に発表され、その後、1956年に単行本として出版された。主人公スミコは、広島に住む10歳の少女で、1945年8月6日の原爆投下で家族を失った。彼女自身は軽度の症状で、火傷も一部だけだったが、原爆症の発症におびえながら暮らすこととなった。スミコは叔父に引き取られ、石川県で生活するようになる。

7年後、17歳になったスミコは、依然として叔父と共に暮らしていた。ある日、大学生のタカミが現れ、彼も長崎の被爆者であり「僕たちはもうずいぶん前に死んでいるんだ……あなたもね。生きているように見えるだけで、実際には灰の人型になっているんだよ。」と悲観的な言葉を口にする。スミコはそうならないと決心した。生き延びるために、スミコは次第に炭焼き労働者のリュウキチやカンジたちと共に文芸活動を始めるようになる。それは、「カツ・ゲンゴ」という団結の象徴となる署名を用い、詩作やポスター制作を通じて彼らの主張を表現する活動だった。

彼らの文芸活動は、やがて米軍基地拡張反対運動の内灘闘争へとつながっていく。この運動は、1950年から始まった朝鮮戦争の影響で、米軍が新たに内灘村に基地を建設しようとしたことに反対するものだった。スミコたちは座り込みなどの非暴力的な抗議活動を行い、日本共産党と近い青年組織、日本民主青年同盟（1952年当時は日本民主青年団）に属するリュウキチやカンジらが熱心に活動をしていた。地元住民や都市部からの学生・労働者も加わり、運動は次第に広がっていく。

日本の右翼団体や米軍からの妨害を受けながらも、スミコたちは活動を続けた。やがて保守的な村民や悲観的だったタカミも闘争に加わり、負傷しながらも戦い続けた。彼らは仲間のマリコを通じて、日系二世のフレディという人物から接触を受けるが、彼は実際にはアメリカのCIC⁽⁶⁾のスパイであった。物語の終盤で、フレディの罠にかかり、スミコが捕らえられてしまう。スミコは自らABCC⁽⁷⁾の身分証を差し出そうとするが、間一髪で逃げ出すことができた。

結局、内灘闘争は基地拡張計画の頓挫によって終りを迎えた。物語の最後、スミコは山

上の朝焼けを見つめながら、どこからともなく「祖国と平和のために戦ってください」という声が聞こえ、物語は締めくくられる。

上述の通り、本作は雑誌版と単行本版があるが、二種の間にはいくつかの異同が見られる。単行本出版にあたり、主に削除がなされ、さらに書き換えも行われているが、それにより文章を整理した印象を受ける。

さらに、特徴的なのは、スミコが内灘闘争へ自らも身を投じようとしたとき、アメリカ側に捕まることを心配したリュウキチにやめるように諭された時の場面で、スミコがいうセリフである。

雑誌版では、以下の通り書かれている。

「誰が私をこんなのにしたの？誰が私を孤児に、そして… 障害者にしたの？私が奴ら（アメリカ軍、筆者注）に自供してしまうっていうの？奴らが私を千々に切り刻んだとしても！…一言だってはくもんか…。」⁽⁸⁾

それに対し、単行本版ではこう修正されている。

「奴らのせいで私は障害を抱えるようになったのよ…」彼女は自分の肩を指でさし、
「私は怖くない、闘いたいのだ！」⁽⁹⁾

悲観的なセリフは短く整理されたうえで、主人公・スミコの闘争への積極性がさらに強調されたセリフに書き換えられている。ロシア語原文に関していえば、単行本版の方がスミコの闘争への意志がより伝わり、感情移入しやすくなっているといえる。

2. 3. ソ連での評価

ソ連本国での評価であるが、1955年に発表された書評二編が存在する。S. ラーリンによる「Сумико — девушка из Хиросимы（スミコ——広島からきた少女）」⁽¹⁰⁾とP. フランケルによる「НА ЛИНИИ МИРА（平和防衛線の上で）」⁽¹¹⁾である。

ラーリンの書評については、基本的には、アメリカ帝国主義の支配下に抑圧され、それに抵抗する日本人民を描いたということを強調して評価している。

他に、彼の文体は、読者を冷静に突き放す独特の特徴を持ち、当時の日本人の生活環境を詳細に描き出し、リアリズムに近い表現を追求している。さらに、アメリカ人医師が被爆者に対して行った行動や、日本人の闘争を鋭く描写した点は、ソ連をはじめとする

海外に日本の現実を伝えるうえで重要な役割を果たした。闘争の中で芽生えたスミコとリュウキチの恋情も詩的に描かれている、と評価している。

一方で批判も加えている。闘争の描写の鋭さについて評価をしながらも、闘争シーンの脆弱さも指摘している。特に、闘争における主人公・スミコの存在感の薄さを指摘している。また、終盤に至るまで、エピソードを詰め込みすぎているにもかかわらず、その語り口が退屈なため、不自然になってしまっているとの苦言も呈している。

ラーリン、フランケル兩人とも共通する批判は、スミコだけでなく、リュウキチ、マリコ、ヤエコらの登場人物の造形が不十分であるとの指摘である。これは、キム自身の小説家としての能力の限界、この作品があまり知られず、埋もれてしまったことの原因につながるかもしれない。

ただし、フランケルの書評では、最後に重要な指摘がなされている。それはこの作品が、「対日姿勢に関して、ソビエト連邦政府と中華人民共和国政府の共同宣言の言葉を裏付けるもの」であることだ。このソ連と中国の共同宣言は1954年10月12日に出された。その中で、「外国の利益に服従する上述の各条約および協定を結んだために、困難な境遇に陥っている日本と日本人民にたいし、中華人民共和国の人民とソ連邦人民は深い同情を示すものである。」⁽¹²⁾ という文言が、この指摘に合致する。

『広島からきた少女』が発表されたのは、1954年8、9月であり、この共同宣言より先んじている。しかし、おそらく作者キムは当時のソ連の意向をつかみ、すでに理解したうえで、この作品を書き上げたのであろう。

これはつまり、ソ連と中国の間で、「米帝国主義の圧制下で苦しむ日本人民」というイメージが当時すでに出来上がり、共有されていたことを示している。では、中国ではこれがいかに翻訳のかたちで伝わっていったのであろうか。

3. 中国語訳二種について

3. 1. 『広島姑娘』と『広島女兒』

ロマン・キムの『広島からきた少女』は、1950年代に中華人民共和国で二つの中国語訳が出版された。最初に出版されたのは、1955年に作家出版社から出版された王民泉訳の『広島姑娘』である。続いて1957年には、新文藝出版社から禾金訳の『広島女兒』が出版された。この二つの翻訳本が出版された背景には、当時の中国出版界の状況や翻訳文化が関係している。

中国学者で比較文学者の傅朗（ニコライ・フォラント）⁽¹³⁾によると、1950年代前半の中国では、ソ連文学が多く翻訳されていた。これは「ソ連に学ぶ」という国家方針に基づく

ものであった。たとえば、オストロフスキーの『鋼鉄はいかに鍛えられたか』は、最初
は英訳版を基に1942年に中国語訳が出版されたが、1949年にロシア語原典から翻訳され
た版が登場し、大ベストセラーとなった。『鋼鉄はいかに鍛えられたか』の成功に続き、
オストロフスキーの『嵐に生まれ出るもの』でも複数の出版社が競い合い、1947年から
1953年にかけて3種類の中国語訳が出版された。このように、同じ作品が複数の翻訳で
出版されることは当時の中国では珍しくなかった。

1950年代初頭の中国出版界、とくに長い間出版の中心地であった上海は、混乱の中にあっ
た。多くの出版社が急速に拡大する翻訳文学市場の中で、激しい競争を繰り返していた。
その結果、同じ作品が異なる翻訳で出版されることが頻繁に起こったのである。こうした
背景により、『広島からきた少女』も二つの翻訳が存在することになった。北京の作家出
版社から出版された王民泉訳『広島姑娘』(1955年)と、上海の新文藝出版社から出版さ
れた禾金訳『広島女兒』(1957年)がそれである。

新文藝出版社は、1952年に群益出版社や海燕書店などを統合し、公私合営の形で設立
された出版社である。後に光明書局や潮鋒出版社を吸収し、最終的には上海文藝出版社と
なった。『広島女兒』が出版された背景には、当時の上海出版界の混乱が影響していると
考えられる。

翻訳の違いについても、元になったロシア語版の違いが影響している。『広島姑娘』は
雑誌『Soviet Literature』の1955年第2号に掲載された英語版を基に中国語訳されたも
のである。一方、『広島女兒』は、1956年に単行本として出版されたロシア語版を基に翻
訳されている。『広島女兒』の翻訳者である禾金は、もともと雑誌『十月』掲載版を基に
翻訳を進めていたが、出版が遅れたため、最終的には単行本を基にした翻訳を発表するこ
とができたと「譯後記」で述べている。

翻訳者の王民泉⁽¹⁴⁾については詳しい履歴がわかっていないが、彼は1950年代に『Soviet
Literature』⁽¹⁵⁾に掲載された英語版を基に複数のソ連文学を中国語に翻訳している。彼の
翻訳作業は、英語を基にしている可能性が高く、ロシア語を直接解することはなかったよ
うだ。一方、禾金⁽¹⁶⁾はロシア語にも精通している。この点で、王民泉と禾金の翻訳ス
タイルには違いがある。

実際に、ロシア語原文に異同がない『広島姑娘』と『広島女兒』の冒頭を比較してみ
ると、翻訳方法にいくつかの違いが見られる⁽¹⁷⁾。

『広島姑娘』

澄子在睡夢中聽見她爸爸和媽媽的聲音，他們正在廚房裏談話。自上星期六起她就

沒有看到她爸爸了。他在南竹屋町的一個機器廠工作，手頭有急活的時候，他就一連幾個星期不回家。

“我聽說他們前幾天轟炸了德山市，並且丟下了日文的傳單，”她爸爸乾咳了一聲（這是他的老毛病）說，“據說他們今天晚上一定要**空襲**我們。這就是說，現在輪到我們頭上了。你們必須早一點兒去，找一個地方……最好是到西廣場去，那兒有很好的壕溝。說不定你們得住上好幾天。我會到那兒去找你們的。”

“也許我們应当到教會學校去**吧**？”

他們**低聲交談**了一些時候，接着耳語聲又逐漸打了起來。⁽¹⁸⁾

『廣島女兒』

純子在**迷迷糊糊**中聽到了**爹媽**的聲音。她們正在廚房裏話。純子自從上星期六以來就沒見過她爹。他在南竹屋町內的一家五金工場裏做工，逢到工場里有緊急工作的時候，他總是接連幾個星期不回家的。

“聽說早些日子德山市被轟炸了，並且還散下了日文的傳單，”她爹說，一面還啞着嗓子咳嗽。“傳單上說的是今天夜里一定要來**光顧**咱們的城市。那就是說，这回該輪到咱們啦。趕早去占個地方吧，……西區廣場比較好些，那兒有個很好的防空洞。也許得坐上幾天几夜呢，不過我会上那兒找你們的。”

“要不還是上那教會學校的地方去**唄**？”

他們轉入了**囁囁低語**。漸漸地，那囁囁低語又响亮起來了。（太字は引用者）⁽¹⁹⁾

たとえば、『廣島姑娘』では「睡夢（眠り）」と訳されている部分が、『廣島女兒』では「迷迷糊糊（うとうとした状態）」となっている。また、「空襲（空襲）」と「光顧（お見舞いする）」、最後の「低聲交談（小声で話す）」と「囁囁低語（ひそひそと小声で）」の表現の違いも見られる。このように、『廣島姑娘』はよりストレートな表現を用いているのに対し、『廣島女兒』はやや文学的で婉曲な表現を好んでいることがわかる。

さらに、「爸爸和媽媽」と「爹媽」の違い、「吧」と「唄」の違いにも注目できる。『廣島女兒』の「爹媽」は古めかしい表現で、方言的な要素を含んでいるが、『廣島姑娘』の「爸爸和媽媽」はより標準的で現代的な表現である。また、「吧」と「唄」も微妙なニュアンスの違いがあり、「吧」は推量を表す助詞で、「もしかしたら教會學校に行くべきかしら？」という意味を含む。一方、「唄」は「やはり教會學校に行けばいいんじゃないか？」という確信的なニュアンスを持ち、いささか古臭い表現である⁽²⁰⁾。

題名についても、二つの翻訳の違いが象徴的である。「姑娘」は若い未婚女性を指す

一般的な表現であり、ロシア語原題の『広島からきた少女』により近い。「女兒」は現代では親子関係の「娘」を指すが、昔は若い女性という意味でも使われていた。この点でも、『広島姑娘』の方が原題に忠実であると言えるだろう。

全体的に見ても、『広島姑娘』の翻訳はシンプルでストレートな表現を特徴としており、読みやすさにおいて優れている。一方、『広島女兒』はやや晦渋で文学的な表現を用いており、古めかしさが感じられる。この違いから、当時の読者にとって馴染みやすかったのは『広島姑娘』であり、作品紹介や書評も『広島姑娘』を基にしていた。また、後述の滬劇の題名も『広島姑娘』が採用されていることから、広く受け入れられたのは『広島姑娘』のほうであったことが窺える。

3. 2. 中国での評価について

『広島からきた少女』の中国語翻訳に関する評価について、謝冰心による書評の他に、王仲夫「一部反映日本人民艱苦英勇斗争的小说——“广岛姑娘”」⁽²¹⁾がある。この書評は、ソ連の書評と同様に、アメリカ帝国主義のもとでの日本人民の闘争を描いた点を高く評価している。主人公スミコの成長と、闘争の過程、平和の象徴としての「平和防衛線」に言及し、日本民主青年同盟（日本民主青年団）や日本共産党の活動を称賛している。また、平和への訴求や国際的な連帯を強調している。

しかし、ソ連での書評との違いは、作品の文学的な評価がほとんどない点である。王仲夫は、「作品の特徴は、最初から最後まで鋭い対立と緊迫感、波乱万丈の展開に満ちている」と述べているものの、この評価も結局は政治的要素に焦点を当てたものである。つまり、日本人民の革命闘争の苦難を描く点を評価するための枠組みでしかない。

もう一つの違いは、中国の書評には批判的な部分がほとんどないことである。ソ連の書評では、主人公以外のキャラクター描写の不足や終盤の展開が性急すぎるといった、構成に対する批判が見られたが、中国の書評にはそうした要素が欠けている。これは、作品の背景にある政治的要素に過度に注目したため、文学的評価や批判がなされなかったことが原因だろう。

結局、中国での評価は、ソ連と中国が共有していた政治的方針に沿ったものであり、1950年代の冷戦期における両国の共産党の密接な関係を反映していると言える。中国においても「米帝国主義の圧制下で苦しむ日本人民」という形象が引き継がれ、政治的視点が強調された書評となった。

4. 滬劇『広島姑娘』への改編

4. 1. 概要

1960年、『広島からきた少女』が上海の伝統劇である滬劇⁽²²⁾に改編された。この舞台劇の題名は『広島姑娘』で、上海市人民滬劇団により上演された。1960年6月に新光劇場で、7月に人民大舞台で上演された記録が残っている。新光劇場での上演に関連するチラシが現存しており、その内容からあらすじが確認できる（写真①②）。主人公スミコは霊子という名前に変更されており、他の登場人物も松本静子や福子、春子、秋子、櫻子などに改められている。主要なキャラクターの一人であるリュウキチだけが翻訳版と同じ名前で登場し、フレディはチャーリーに変更された。これらの名前が変更された理由は不明である。

チラシの表面には「反対美帝侵略、坚决解放台湾、保卫世界和平」というスローガンが掲げられており、さらに「歌颂中国人民英勇反击美帝侵略」と題名の上に書かれている。これは「日本人民が勇敢にアメリカ帝国主義の侵略に立ち向かう姿を讃える」という意味である。チラシの裏には劇のあらすじが書かれており、基本的な筋は原作に添ったことが読み取れる。

さらに、チラシには「美帝国主义从台湾滚出去，从南朝鲜滚出去，从日本滚出去，从菲律宾滚出去，从南越南滚出去，从西太平洋滚出去！」という強烈なスローガンが記されており、「アメリカ帝国主義は台湾、韓国、日本、フィリピン、南ベトナム、西太平洋から出ていけ！」というメッセージが込められている。その下には「中朝人民团结せよ！中日人民团结せよ！中越人民团结せよ！アジア人民团结せよ！全世界人民团结せよ！」と書かれており、この劇がプロパガンダの一環であることが明らかになっている。

注目すべき点として、この劇の原作がソ連の作家による翻訳であることが完全に省かれていることが挙げられる。この理由を1949年の「向ソー辺倒」から1956年のフルシチョフのスターリン批判や平和共存路線に端を発する中ソ対立に求めることができよう。このことにより、観客に「米帝国主義の压制下で苦しむ日本人民」の姿が中国から発信されているという誤解を与える結果となった。実際に日本人がこの劇を見た際、そのような誤解が現実のものとなってしまったのである。

当時の中国での反応を探ると、1960年8月28日の『上海戯劇』に周永康が「怒吼的富士山——談沪剧《広島姑娘》」⁽²³⁾という劇評を発表している。ここでは、この作品が「日本人民が団結し、反米闘争を展開している」こと、そして「日本共産党の指導の下で闘争が強化され、最終的な勝利に向かっている」という点が強調されている。特に、舞台背景に描かれた「燃える富士山」が日本人民の怒りを象徴し、圧倒的な力で敵を追い払うシーン

がクライマックスとして描かれている。この場面は、団結と抵抗の重要性を視覚的に強調している。

最後には「日本は日本人民のものであり、中国人民はその正義の闘争を断固として支持する」と締めくくられ、東アジアにおける反米・反帝国主義の連帯が強調されている。

4. 2. 新劇訪中団による反応について

1960年秋、「訪中公演日本新劇団」（以下「新劇訪中団」）が中国を訪問し、滬劇『広島姑娘』を観劇した。この新劇訪中団は、劇作家の村山知義を団長とし、副団長に千田是也や滝沢修、山本安英、杉村春子らが務め、文芸顧問には木下順二が加わっていた。さらに、文学座や俳優座、劇団民芸、ぶどうの会、東京芸術座の俳優たちも参加しており、加藤治子、北村和夫、野村昭子、北林谷栄、鈴木瑞穂、佐々木すみ江、久米明、左右田一平など、日本演劇界を代表する錚々たるメンバーが参加していた⁽²⁴⁾。

新劇訪中団は、1960年9月12日から11月8日にかけて、北京、武漢、上海、広州で公演を行い、中国側の演目も観劇した。彼らが上演した作品は、『死んだ海』、『夕鶴』、『女の一生』、『石の語る日』およびシュプレヒコール『三池炭鉱』、『沖縄』、『安保阻止の闘いの記録』などだった。この訪問は、中華人民共和国が外国の新劇を招いた初めての機会であり、また日本の新劇が海外で公演を行った戦後初めての出来事でもあった。

中国では新劇訪中団の公演が大きな反響を呼び、各地で熱烈な歓迎を受けた。新聞は「巨大な成功」と称賛し、毛沢東主席や周恩来首相、陳毅副首相からも引見を受けた。

文化界の重鎮である田漢、歐陽予倩、梅蘭芳らも歓迎の意を示し、上演以外にも、基幹産業や人民公社、輸出展覧会、革命の史跡などを視察。さらには、演劇学校や音楽・舞蹈学校での古典劇、現代劇、舞蹈劇、児童劇、歌劇、舞劇、人形劇、雑技などを鑑賞し、現地の演劇人との意見交換も行った⁽²⁵⁾。

新劇訪中団が滬劇『広島姑娘』を観たのは1960年10月25日であった⁽²⁶⁾。記録によれば、俳優座の岸輝子は滬劇について「地方劇としては比較的新しく、初めから現代物を多く手がけてきたが、曲調や演出が単調で、解放後はより優れた作品が生まれている」と述べている。特に『火花』という滬劇は1955年に上海市のコンクールで上演され、大革命劇を扱った最初の滬劇作品とされていた。

『広島姑娘』は、日本の基地闘争を題材にした劇であり、日本人の登場人物が多く、アメリカ人はわずか数名だった。岸らは、日本の観客に対してこのまま公演するには不安があるため、自分たち数人だけに披露されたという。しかし、岸は劇中の衣装や舞台背景が日本の現実と大きく異なることに違和感を覚えた。たとえば、主人公やその友人が明治

時代風の袴を着ていたことや、労働者の群衆が奇妙な着物を身につけていたこと、また大学生や議員が女性用の着物を着ていたことに困惑したという（写真③）。さらに、内灘の基地闘争を描いているはずなのに、舞台背景に富士山が描かれていたことに、岸は驚きを隠せなかった。

『悲劇喜劇』第15巻第1号⁽²⁷⁾には、『広島姑娘』の上演時の写真が掲載されており、確かに舞台には富士山と鳥居が配置されていた（写真④）。このような視覚的なちぐはぐさから、岸は中国と日本が「案外知り合っていない」ことに驚いたと述べている。さらに、長剣を帯びた参議院議員が「日本軍人の典型」の姿で演じられていることに、不安を感じたという。

岸はまた、視覚的な違和感が話劇（現代劇）であれば生じなかった可能性が高いと指摘している。これには前年度に中国で上演された同じく原爆を扱った堀田清美作『島』の写真を見せてもらったと岸はいうが、その信憑性にはやや疑問も残る。滬劇団とずっと話し合いができれば良かったと振り返る岸だが、滬劇が世界的な広がりを持つ題材に挑み、わかりやすく展開させた点は評価している。滬劇が今後、より多くの支持を得て発展していくだろうとも期待していた⁽²⁸⁾。

訪中国の文芸顧問である尾崎宏次や木下順二も、帰国後の座談会で『広島姑娘』について言及している。

尾崎 （略）日本だったら、アジプロ劇として捨てられちゃうものだよ。それがやっぱり生きているということがね（略）。

木下 そういう連続性ということだね。革命を通して一ぺん全く断絶して新たに始まったということが、芸術だけじゃなくて、社会全体の問題としてあるわけだ。（略）歴史の実在感があるんだね⁽²⁹⁾。

彼らは、中国人が革命を通じて現在もその革命の中で生き続けているとし、劇中の主人公スミコを革命の志士と同一視しているとも考えた。このようなイデオロギーに強く引き寄せられる傾向は、主に男性団員に見られる。村山知義は中国政府、中国人民の素晴らしさを手放しで称賛している。当時の日本人は、中国で反右派闘争や大躍進による大飢饉が発生していたことなど知る由もなかったのである⁽³⁰⁾。

一方、女性団員は、イデオロギーよりも視覚的な違和感に引き寄せられる傾向があった⁽³¹⁾。富士山や衣装のちぐはぐさに対する違和感を強く抱き、思想的な評価よりもまず視覚的な不一致が気になったようである。そのため、手放しの称賛とはならなかったのである。

結局、ソ連から中国へと伝わった「米帝国主義の圧制下で苦しむ日本人民」の形象は、日本へは完全な形で継承されなかった。もし、『広島からきた少女』が日本語訳され、滬劇『広島姑娘』が日本で上演されていたら、状況は変わっていたのかもしれない。

5. 主人公の成長と文学的側面

『広島からきた少女』についての研究には、坂中紀夫の論考二編⁽³²⁾とウルシュラ・スティチェック⁽³³⁾の文章がある。坂中は「ロマン・キムと固有名の問題：日本に関連する諸作品」という論考で、ロマン・キムの独自の探偵小説について論じている。彼の探偵小説は西洋の探偵小説とは異なり、論理的なパズルとしての要素がない。坂中はその理由を、キムの作家としての技量の問題だけでなく、彼自身の個人的な経験にあると指摘している。

小説の冒頭で、主人公スミコは被爆後の救護所で、看護婦が黒板に書いた「219」という番号を消して、亡くなった女の子の処理をするのを目撃する。それは、死と共に、「固有名」を奪われ、個人としての尊厳を失うことを意味していた。この経験がスミコを、失われた名前と尊厳を取り戻すために基地反対運動へと導いていく。坂中は、キム自身も複数の名前を使い分けたことに触れ、彼の作品全体で「固有名」に対するこだわりが強く見られると論じている。

一方、スティチェックは『広島からきた少女』を「少年小説」と捉えている。彼女は、この作品に冷戦時代のプロパガンダ要素が多く含まれているため、1950年代には他国語に翻訳されず、広く知られることがなかったのではないかと分析している。特に、物語の中心はスミコが10歳から17歳まで成長する過程であり、周囲の仲間たちも同年代であることから、スティチェックの「少年小説」との指摘はこの意味では妥当であろう。

スミコは母親から「まるで男の子みたい」⁽³⁴⁾と言われるほど、正義感が強い子供であった。原爆投下直前、近所の男の子が別の女の子の人形を壊そうとする場面では、スミコが男の子に飛びかかるシーンが描かれており、このエピソードからも彼女の正義感が窺える。原爆投下後、スミコは石川に移り住むが、長崎で被爆した大学生タカミの影響を受け、一時は生きる希望を見失いかける。しかし、その後、基地反対運動に参加することで、自分の存在意義を見つけ、次第に自分を取り戻していく。

スミコが基地反対運動に関わるきっかけとなったのは、仲間であるリュウキチらの誘いであった。しかし、これに対し彼女の叔父は反対し、スミコを活動から遠ざけようとする。スミコは自由を奪われることに不満を持ち、ついに叔父に反抗する。雨の中でずぶぬれになりながらも、一晩外で座り続け、周囲の人々も彼女を見守る中、叔父は暴力を振るい彼女を家に引きずり戻そうとするが、スミコは自分の意志を貫き通す。この場面で描かれる

スミコの強さと忍耐力は、物語の中でも特に印象的である。

叔父はスミコに対して憎しみを抱いていたわけではない。原爆で家族全員を失い、親代わりとしてスミコを守ろうとした結果、彼女が危険な活動に関わることを恐れたのである。しかし最終的に、叔父もスミコの意思を尊重し、彼女が基地反対運動に参加することを許す。スミコは、雨に濡れながらも数日間にわたって抵抗を続け、その過程で身体的な痛みやケロイドの症状にも耐え、決して屈しなかった。

物語が進むにつれて、スミコとリュウキチの間の感情は深まり、彼女の闘争への意志もますます強くなっていく。前出の「私は怖くない、闘いたい!」という彼女の言葉は、スミコがすでに後戻りできない決意を持っていることを象徴している。

スミコたちの活動は、基地反対運動へと発展し、村の住民たちも巻き込まれていく。住民たちは身の危険を顧みずに座り込みを続け、時には負傷する者も現れる。スミコも負傷し、警察や米軍に捕らえられた仲間を救うため、自らその渦中に飛び込もうとするほどの勇気を見せる。この自己犠牲的な行動もまた、彼女の人間的成長を示している。

この物語全体を通して、スミコの内面的な葛藤や彼女を取り巻く複雑な人間関係が描かれている。仲間たちと共に目標に向かって団結し、当初はスミコに反対していた人々も次第にその運動に巻き込まれていく。そして、スミコ自身もその過程で成長を遂げていくのである。

坂中は「固有名」を「個人の尊厳」の象徴として捉え、論じている。しかしそれだけでなく、スミコがケロイドの痛みやかゆみに苦しみ、死の恐怖と戦いながらも、闘争活動を通じて生の実感を得ていく様子が描かれている。原爆によって肉体的にも精神的にも深い傷を負ったスミコが、闘争を通じて自己の尊厳を取り戻していく過程こそが、この作品の重要なテーマとなっているのである。

この作品の文体の特徴として、詳細な情景描写や会話形式の多用が挙げられる。ロマン・キム作品の特徴である、諜報活動に関する情報量の多さや日本の日常風景を克明に描く点は、この作品にも多く見られる。冒頭の前爆投下直前の広島の人々の生活、石川県の農村の風景、繁華街の状況など、細部まで丁寧に描写されている。

また、会話形式の多用によって、登場人物の感情が間接的に表現されている。心理を直接描くのではなく、会話の中で、母親がスミコや弟を気遣う心情、診療所での緊張感、原爆症への不安、危険な街中を歩く恐怖などが巧みに表現されている。

全体的には単純で冷静な筆致が貫かれているが、主人公の成長を促す場面では感情があふれ出る描写が見られる。こうした感情の起伏がコントラストを生み、印象的な場面として際立たせている。

『広島からきた少女』は、共産党や日本民主青年同盟（日本民主青年団）、ABCC、CICなどが登場し、冷戦時代の共産圏側のプロパガンダ的な要素が強調されがちだが、それだけではなく、一人の少女の内面の成長と葛藤を描いた小説でもある。ロマン・キムは、スミコを基地闘争や平和運動の象徴として描き、その成長する姿を通して戦後日本の社会問題を浮き彫りにした。漢字で表記される単なる地名ではなく、被爆地「ヒロシマ」から基地反対運動に立ち上がった「ウチナダ」への象徴として、主人公スミコにその思いを託したのである。

6. おわりに

本論では、『広島からきた少女』の概要、本国ソ連での評価、中国語訳の出版、中国での受容の流れを確認した。その過程で継承されたのは、「米帝国主義の圧政下で苦しむ日本人」という形象だった。滬劇への改編を経て新劇訪中団に鑑賞されたが、その後、日本で紹介されず、受容もされなかった。その理由を考えてみたい。

ロマン・キムの作品で唯一日本語に翻訳されているのが『順川で見つかったノート』（『Тетрадь, найденная в Сунчоне』1951年発表）である。この翻訳は1952年に『切腹した参謀たちは生きていた』という題で高木秀人によって出版され、1976年には長谷川蟻による新訳が同じ題名で登場した。この小説は、朝鮮戦争を舞台に旧日本軍の将校が戦後生き延び、日米韓の諜報活動に関わるという内容で、「KATO 機関」や「ABC 作戦」といったセンシティブなテーマが扱われている。

1976年版で長谷川蟻はあとがきに、「当時の日本はGHQの支配下にあったため、日米の諜報員が実名で登場する暴露小説を翻訳するには、原作を大幅に削らざるを得なかった。前の訳者（高木秀人）の序文にも『物語の背骨を抜いてしまった』とある」と述べている。

実際、GHQのプレスコードは1945年から1952年のサンフランシスコ講和条約発効まで敷かれていたが、その後もしくはロマン・キムの暴露的要素を含む作品は翻訳しにくかったのだろう。こうした事情もあり、一部のソ連関連の雑誌を除いて、『広島からきた少女』をはじめとするロマン・キムの作品が日本で紹介されることはなかったのかもしれない。

『切腹した参謀たちは生きていた』は、旧日本軍の将校が東京大空襲を逃れ、身分を隠しながら終戦直後の混乱期に暗躍する物語である。諜報活動に関する情報量は圧倒的で、読者は主人公の行動に引き込まれていく。しかし、物語の終盤で主人公は、朝鮮半島でアメリカ人将校と共に朝鮮軍の攻撃を受け、あっけなく死を迎える。結末は「自由朝鮮独立万歳！全世界の平和万歳！」という言葉で締めくくられるが、その唐突さは否めない。

一方、『広島からきた少女』は主人公の少女の成長を描いており、いくつかの困難を乗り越えた後、物語は円満に終わる。読者は主人公スミコに感情移入しやすく、『切腹した参謀たちは生きていた』のような拍子抜けすることはない。ロマン・キムの作家としての発展が見られ、『広島からきた少女』においても、主人公の成長を通じて文学的な価値が見いだせる。

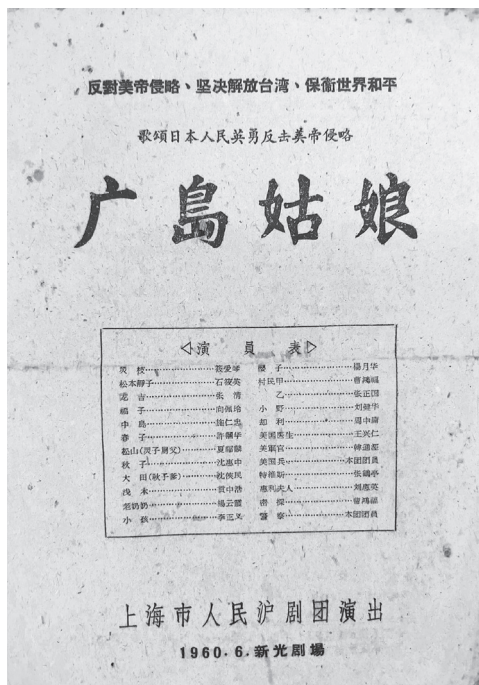
日本近現代史において、原爆投下後の終戦を経て日本国民は二度と戦争の道を歩まず、平和を希求するようになった。1952年のサンフランシスコ条約やその翌年の連合国占領からの独立の間、朝鮮戦争の影響で、内灘闘争や砂川闘争など各地で基地反対運動が起こり、日本国内には反米帝国主義的な傾向があったことも事実である。それは第一次安保闘争でピークを迎え、第二次安保闘争の挫折で終焉を迎える。GHQのプレスコードが失効してしばらく経った1950年代後半から60年代前半にかけて、もし日本語訳の動きがあれば、ロマン・キムの作品は出版され、広く知られていたかもしれない。

本作品の最後の時点は1952年から53年頃だが、この時期にはまだ闘争の中に希望があった。希望の中で物語が終わっているのである。また、被爆者の物語でもある。『広島からきた少女』がいわゆる「原爆文学」に該当するか、およびさらなる文学的価値については、稿を改めて検討したい。

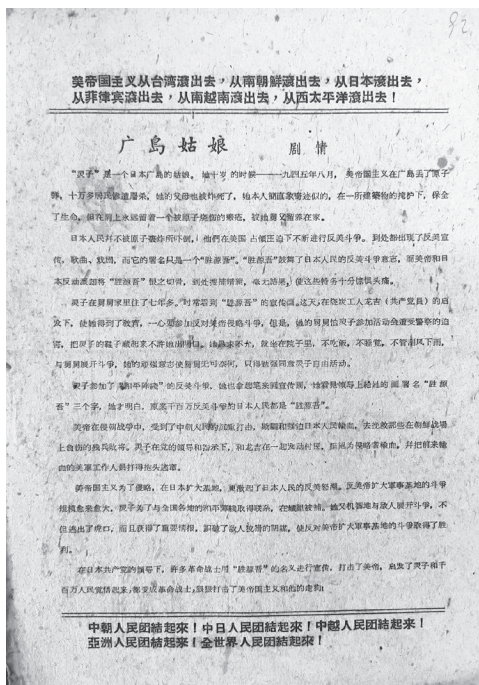
【謝辞】

本研究に対して貴重な助言を賜った方々に感謝申し上げます。また、本研究はJSPS 科研費 JP20K00373 の助成を受けたものです。

【参考写真】



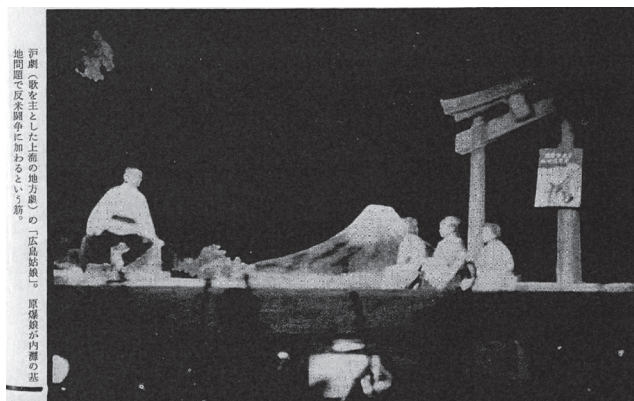
写真① チラシ表面



写真② チラシ裏面



写真③ 滬劇「広島姑娘」(『文匯報』1960年7月30日第1面)



写真④ 滬劇「広島姑娘」(『悲劇喜劇』第15卷第1号、1961年1月)

注

- (1) 『讀書月報』1955年11月24日第5期。『冰心全集 豪華珍藏本 4』（海峡文艺出版社、1999年）pp.235-238を参照した。
- (2) 通过这本书，我们深深的知道了日本人民正在美帝国主义的残酷的压迫与榨取之下，作着不屈不挠的“为祖国，为和平”的艰苦斗争。（『讀書月報』1955年11月24日第5期。『冰心全集 豪華珍藏本 4』（海峡文艺出版社、1999年）p238）
- (3) 登場人物の表記については、中国語訳二種においても、たとえば主人公・スミコの表記が「澄子」（『廣島姑娘』）と「純子」（『廣島女兒』）と分かれ、判断が難しいため、すべてカタカナ表記とする。
- (4) この箇所は、アレクサンドル・クラーフ著、村野克明訳『東京を愛したスパイたち 1907-1985』（藤原書店、2016年）pp.274-300「第3章 キン・キリュウ（ロマン・キム）——ソ連流国際探偵小説の元祖」を参照した。
- (5) 日本では、「Тетрадь, найденная в Сунчоне»—«Новый мир», 1951, No. 5（『順川で見つけたノート』）が、『切腹した参謀たちは生きている』（高木秀人訳、五月書房、1952年）との題名で翻訳・出版された。この翻訳版は内容が大幅にカットされ、後年改めて、完全版が同題名で、『切腹した参謀たちは生きている』（長谷川蟻訳、晩聲社、1976年）が出版された。ロマン・キムの日本語訳はこれのみである。
中国では、『在順川發現的一本日記』（人民文學出版社、1952年）、『看完烧毁』（群衆出版社、1984年）、『枕头底下的眼镜蛇』（山東文芸出版社、1986年）、『特殊使命的间谍』（遼寧人民出版社、1986年）などが翻訳・出版されている。
- (6) CIC (Counter Intelligence Corps) は、対敵諜報部隊、防諜部隊とも訳される。主にスパイ活動の監視、妨害活動を行う。終戦前に第441防諜部隊（CIC）派遣隊が日本に派遣され、連合国占領期の防共工作に携わった。日本各地に支部が置かれ、下部組織は日系二世が担っていた。（<https://www.441st.com/> 最終閲覧 2024年9月17日）
NHKの番組、『未解決事件 File.10 下山事件』では、戦後最大の謎とされる、国鉄下山総裁が殺害された事件にCICが深くかかわっているとしている。さらに列車脱線事故である「松川事件」も関連があるとしている。（未解決事件 File.10 下山事件 第2部 <https://www.nhk.jp/p/special/ts/2NY2QQLPM3/episode/te/DX9VRJRJ6B/> 最終閲覧 2024年9月17日）
- (7) ABCC (Atomic Bomb Casualty Commission)、日本語名称は、原爆傷害調査委員会である。原爆放射線被ばく者における放射線の医学的・生物学的晩発影響の長期的調査を米国学士院－学術会議 (NAS-NRC) が行うべきであるとするハリー・トルーマン米国大統領令を受けて、米国学士院が1946年に原爆の被爆者の調査研究機関として設立した。（ATOMICA 原子力百科事典 原爆傷害調査委員会 (ABCC) https://atomica.jaea.go.jp/dic/detail/dic_detail_1480.html 最終閲覧 2024年9月17日）

主に被爆者の観察実験を行い、治療などは行わなかった。被爆者からは反感を持たれていた。(『西日本新聞』ABCCに怒り「実験」の印象は変わらない 原爆を背負って (19) 2020/7/26 11:02
<https://www.nishinippon.co.jp/item/n/623472/> 最終閲覧 2024年9月17日)

- (8) — Это кто сделал? Кто сделал меня сиротой и... калеккой? I я буду говорить им? Пусть изрежут на куски!.. Ни слова.... «Октябрь», 1954, No. 8 Стр.67
- (9) — Меня сделали калеккой... — Она ткнула себя пальцем в плечо. — Я хочу бороться, я не боюсь!
«Девушка из Хиросимы» Молодая гвардия Стр.124
- (10) С. Ларин, Сумико — девушка из Хиросимы. —«Звезда» 1955. Ха 1. Стр. 177-178.
S. ラーリンについては不明。当時多くの書評を各雑誌に掲載していた。
- (11) Р. Френкель. На линии мира. —«Дальний Восток» 1955. No. 3. Стр. 187-189.
Р. Франкелについても不明。
- (12) データベース「世界と日本」(代表:田中明彦) 日本政治・国際関係データベース 政策研究大学院大学・東京大学東洋文化研究所 [文書名] 対日共同宣言(中華人民共和国政府およびソヴィエト社会主義共和国連邦政府の日本に対する関係についての共同宣言) [年月日] 1954年10月12日 [出典] 日本外交主要文書・年表 (1), 671頁. 外務省アジア局中国課編「中共対日重要言論集」第1集, 117-123頁. <https://worldjpn.net/documents/texts/JPRU/19541012.D2J.html> 最終閲覧 2024年9月17日
- (13) 傅朗 (Nicolai Volland) 《政治认同：1950年代中国与苏联、东欧的文化交流》(沈志华, 李滨 (Douglas A. Stiffler) 主编《脆弱的联盟：冷战与中苏关系》，社会科学文献出版社，2010年)「文学翻译与政治认同」pp.93-113
- (14) ニコラーエフ (1911-1963) 『収獲』(時代出版社、1952年)、チャコフスキー (1913-1994) 『我們這裏已是早晨』(時代出版社、1951年) ケルババエフ (1894-1974) 『白金國的爱素丹』(1951年) など。
- (15) 1946年から1990年までソ連で発行されていた雑誌。モスクワの外国語出版社から刊行されていた。1930年代から40年代のソ連作品を英語、フランス語などに訳し、世界に紹介した。(https://search.worldcat.org/ja/title/850956 Soviet literature 最終閲覧 2024年9月17日)
- (16) ラヴレニョフ (1891-1959) 『美國之音』(潮鋒出版社、1949年)、オストロフスキー (1904-1936) 『暴風雨所誕生的』(潮鋒出版社、1947年) など。
- (17) 冒頭の個所は、ロシア語原文においても、雑誌版と単行本版には異同はない。中国語訳においては、英語からの翻訳という同質性が完全に担保できない要素もあるが、それぞれ翻訳者の傾向を見るうえで、有効と考える。

翻訳比較がより明確になるよう、以下にロシア語原文と日本語訳を示す。

Сумико слышала сквозь сон голоса родителей. Они разговаривали на кухне. Сумико не видела отца

с прошлой субботы. Он работал в ремонтной мастерской в квартале Минамитакэя и, когда там была срочная работа, не приходил домой целыми неделями. Говорят, на-днях бомбили Токуяму и сбросили листовки на японском языке, — рассказывал отец, глухо покашливая. — В листовках сказано, что сегодня ночью непременно навестят наш город. Теперь, значит, наша очередь. Пойди пораньше и займи место… лучше у Западного плаца, там хорошая щель. Может быть, придется просидеть несколько суток. А я разыщу вас там.

— А может быть, туда подняться, где миссионерская школа?

Они перешли на шопот. Постепенно шопот становился громче.

(スミコは眠りの中で両親の声を聞いた。彼らは台所で話していた。スミコは先週の土曜日以来、父親に会っていなかった。父は南竹屋町の修理工場で働いていて、急な仕事があると何週間も家に帰らなかった。

「この前、徳山が爆撃されて、日本語のビラが撒かれたって話だ」と父は咳をしながら話していた。「そのビラには、今夜必ずうちの町にも来るって書いてあった。ついに俺たちの番だな。早く行って、西広場のところに場所を取っておきなさい。あそこがいい防空壕がある。何日かそこにいることになるかもしれない。僕も後でそこに行くから。」

「教会学校のあたりに行くのはどうかしら？」と母が提案した。

彼らは声をひそめたが、徐々にその囁き声は大きくなっていった。）

(18) 『廣島姑娘』(1955 年、作家出版社) p.7

(19) 『廣島女兒』(1957 年、新文藝出版社) pp.3-4

(20) この箇所については、大東文化大学中国語大辞典編纂室編『中国語大辞典』上・下(角川書店、1994 年)、汉语大词典编纂处编『汉语大词典订补 精装』(上海辞书出版社、2010 年)などを参照した。

(21) 『光明日報』1955 年 11 月 17 日付「圖書評論」。

(22) 滬劇とは、上海の伝統的地方劇である。上海語で上演される。もともとは浙江・江蘇地方で歌われた灘簧をルーツとする。1941 年に上海滬劇社が結成され、1953 年には上海人民滬劇団が成立し、改革を進めた。(『中国大百科全書』「沪剧」<https://www.zgbk.com/ecph/words?SiteID=1&ID=91471&Type=bkzyb&SubID=61254> 最終閲覧 2024 年 11 月 30 日)

(23) 「国营一机 周永康」との署名が入っているが、周永康については不明。

(24) 「団員名簿」(『古い国新しい芸術—訪中公演日本新劇団の記録—』、筑摩書房、1961 年 7 月) pp.271-273

(25) 「はじめに」(『古い国新しい芸術—訪中公演日本新劇団の記録—』、筑摩書房、1961 年 7 月) pp.5-7

(26) 倉林誠一郎「日記」(『古い国新しい芸術—訪中公演日本新劇団の記録—』、筑摩書房、1961 年 7 月) p.240 倉林誠一郎(1912-2000)は演劇製作者。俳優座主事。

なお、「汙」の正字は「滬」であるが、『古い国新しい芸術』では、「汙」と表記しているので、引用の際はそのまま表記する。

- (27) 『悲劇喜劇』第15巻第1号(141号、早川書房、1961年1月) pp.51-52 写真④参照。掲載に際しては早川書房よりご許可をいただいた。記して感謝申し上げます。
- (28) 岸輝子「地方劇の改良発展」(『古い国新しい芸術—訪中公演日本新劇団の記録—』、筑摩書房、1961年7月) pp.59-63 岸輝子(1905-1990)は俳優座創設者の一人。千田是也(1904-1994)の妻。
- (29) 戌井市郎、大塚道子他「座談会 見たまま感じたまま」(『古い国新しい芸術—訪中公演日本新劇団の記録—』、筑摩書房、1961年7月) pp.124-125
木下順二(1914-2006)劇作家。『夕鶴』が有名。尾崎宏次(1914-1999)は演劇評論家である。
この座談会にはほかに古賀宏一(美術監督)、佐々木すみ江(俳優)、関京子(俳優)、竹内敏治(舞台監督)、文野朋子(俳優)が出席した。
- (30) 村山知義「顧みて、ひっくるめて」(『古い国新しい芸術—訪中公演日本新劇団の記録—』、筑摩書房、1961年7月) pp.13-24
- (31) 女性団員は上記の座談会において、イデオロギーよりも、中国側の俳優自身の容姿、人柄や託児所の体制など多岐にわたる意見を述べている。
- (32) 坂中紀夫「ロマン・キムと固有名の問題：日本に関連する諸作品」(『Slavistika：東京大学大学院人文社会系研究科スラヴ語スラヴ文学研究室年報』第30号 pp.165-183, 2015年3月、東京大学大学院人文社会系研究科スラヴ語スラヴ文学研究室)、同「ロマン・キムと主体性の問題：探偵小説—精神分析—偶有性」(『Slavistika：東京大学大学院人文社会系研究科スラヴ語スラヴ文学研究室年報』第32号 pp.117-137, 2017年)
- (33) ウルシュラ・スティチェック「世界で読めるヒロシマとナガサキ—Lingua Hiroshima のデータベース「多言語で読む広島・長崎文献」を巡って〈改訂版〉—」(<https://www.linguahiroshima.com/files/On%20LinguaHiroshima%20Database.pdf> 最終閲覧2024年8月23日)
- (34) «Девушка из Хиросимы» Молодая гвардия Стр.4